特　集

アジ研流
読書案内
―研究者が薦める3冊

新興国福祉国家を考える際の三冊

宇佐見耕一

●はじめに

二一世紀になってから新興諸国の経済的発展が注目されると同時に、それら諸国における社会的な問題にも関心が集まるようになった。そうした社会的問題への対処として、新興諸国では社会保障制度の整備と改革が行われている。そこで新興諸国における社会保障に焦点を当てて、新興諸国の国家の一側面を福祉国家論の中で分析しようとする論者が出現するに至った。従来、福祉国家論は先進資本主義国家の一側面として研究されてきており、新興諸国を福祉国家論の対象とする論者はきわめて少なかった。

一．宮本太郎著『福祉政治：日本の生活保障とデモクラシー』有斐閣、二〇〇八年

この本は、日本における社会保障の体系がどのようになっているのか、すなわち日本における福祉国家の性格がいかなるものかという点、およびそれらがいかなる要因で形成、変容していったのかがリサーチ・クエスチョンとなっている。しかし、本書の第一章と第二章は、今日広く用いられている福祉国家論の方法論を分かりやすくまとめ、かつ最新の研究動向も取り入れられ、新興諸国の福祉国家を分析する際の参考になる。

福祉国家がいかなる性格を持っているのかという問いに宮本は、福祉レジームと雇用レジームという概念を用いて説明している。福祉レジームとは社会保障を構成する要素、すなわち社会保険、公的扶助、ケア、医療等が民間の福祉提供者や家族も含めてどのように組み合わさって、全体としてどのような性格を持っているのかを示すものである。福祉レジームを類型化した研究の代表的なものにエスピン＝アンデルセンの三類型がある（エスピン＝アンデルセン［二〇〇一］）。すなわち社会民主主義レジーム、自由主義レジーム、保守主義レジームである。

また、生活保障の制度として雇用や労働市場にかかわる制度や政策も重要であり、それを雇用レジームと呼んでいる。雇用レジームと関連して、ケインズ型の完全雇用政策にイギリスの社会保障制度の骨格であったベヴァリッジ型社会保障体系を組み合わせて「ケインズ・ベヴァレッジ型福祉国家」と名付けている論者もいる。

そのような福祉レジームの形成また変容を分析する手法として宮本は、利益政治と言説政治の二つの手法があるとしている。利益政治の本質は、利益の組織化と動員であり、多様な利益集団が自由に競合しながら圧力活動を展開する多元主義的政策過程と、労使を中心とした包括的利益集団が政府とともに政労使の協議を通して協調するネオ・コーポラティズムがある。他方、こうした利益政治のみでは福祉国家分析は不十分であり、多様な言説や操作により人々が各政策に関してどのように判断するのかという言説政治のレベルにも留意すべきであるとしている。言説政治は既存の福祉レジームが揺らいだり、転換したりして、人々の利益が流動化したときより重要となる。言説政治の分析手法として「避難回避の政治」、また諸利益が流動化したとき言説やアイディアの役割が大きくなるという。また彼は、福祉レジームの形成期の政治、レジーム削減期の政治、それから一九九〇年代から本格化するレジーム再編期の政治のあり方は異なっている点に注目している。

二．金成垣『後発福祉国家論：比較のなかの韓国と東アジア』、東京大学出版会、二〇〇八年

金は、そうしたレジーム論に代表される従来の比較福祉国家研究を「横」の類型論と呼び、これに対して歴史的文脈を考慮した「縦」

の動態論が比較福祉国家研究には必要であるとしている。金のこのような問題意識は、韓国における福祉国家研究をする際にみいだされたものである。

韓国では世界経済がグローバル化し、また新自由主義的経済政策が重視される中で、国民皆保険・皆年金の実現、権利性を明確にした公的扶助改革などの福祉国家化が推進されたという事実認識がある。先進資本主義諸国における福祉国家が経済のグローバル化で危機に面している中で、韓国が福祉国家化しているという問題を解くには、従来の類型論に加えて、「後進性」ないし「遅れてきた福祉国家」という視点が必要であると金は問うている。具体的には、グローバル化の中で福祉国家化しているという韓国の歴史的特殊性を議論に組み込む必要があるとする。その際、一九九〇年代後半以前の状況を福祉国家化が遅れていた「遅滞」の局面と、一九九〇年代後半以降の福祉国家化がスタートした「後発」の局面に分けて分析を行っている。

金によると、一九九〇年代後半の経済危機とそれにともなう失業者と貧困者の増大への対応をとおして「市場経済の安定装置としての福祉国家」、そして政治的には金大中政権のもとでの上からと、社会運動という下からの働き掛けをとおして「民衆の政治的組織化の産物としての福祉国家」という韓国における福祉国家の条件が成立した。この「遅れてきた福祉国家」の内実は、「脱工業化との同時性」、および「脱階級化との同時性」という特徴の中で、西欧福祉国家が四半世紀以上かけて経験してきた福祉国家の形成と抑制、または再編を同時に経験している状況にあると分析されている。このように韓国の事例から抽出された福祉国家分析における「後発性」概念の導入は、新興諸国とりわけアジアにおける福祉国家分析に際して参考とされるべき概念である。またそれはラテンアメリカにおける福祉国家の特色として、その「早熟性」という特色との比較研究の可能性を示唆しているようにも思える。

三、李蓮花、『東アジアにおける後発近代化と社会政策：韓国と台湾の医療保険政策』ミネルヴァ書房、二〇一一年

この後発性という概念を出発点として李は、韓国と台湾の医療保険制度の形成を分析している。彼女によると欧米の福祉政治の理論的枠組みをそのまま東アジアに適用しても、韓国や台湾の社会政策や近代化の歴史性を軽視した「没歴史的」解釈になる可能性があるとする。そこで、東アジアの近代化の特徴はその後発性にあるとの認識の上に立ち、韓国と台湾の医療保険政策の共通点や相違点を検討している。

両国の医療保険制度は一九七〇年代までの制度導入期には、経済構造の違い（大企業中心の韓国に対し中小企業中心の台湾）や、権威主義体制（排除的開発独裁の韓国に対して包摂的党国体制の台湾）によりその相違点が説明されている。一方医療保険の皆保険化は、急速な経済発展や政治的民主化の過程で達成された。そのなかで皆保険期の両者の相違は、制度的遺制に加えて、民主化方式の相違（急速な台湾と漸進的な韓国）が重要であったとする。

最後に李は、東アジア型社会政策の可能性を検討する。まず、エスピン・アンデルセンの三つの福祉レジームと東アジアという地域を対象とした福祉制度では、分析の段階が異なり、そうした議論はあまり生産的でないと判断する。その上で、両国の医療保険政策形成から導き出される共通点として、第一に普遍主義志向、第二に社会保険方式があり、第三に経済・社会格差への対応として日本が取り入れた傾斜的財政支援を用いている点、第四に、均衡のとれた発展がキーワードとなっている点があるとする。李の研究は欧米の福祉国家論を批判的に発展させ、東アジアにおける経済発展研究や民主化研究の成果を取り入れたもので、金の成果と合わせて東アジア発の福祉国家論として欧米中心の福祉国家研究に一石を投じ、また比較福祉国家研究をより厚くするものであるといえる。

（うさみ　こういち／アジア経済研究所　ラテンアメリカの福祉国家論・社会政策論）

《参考文献》

●エスピン＝アンデルセン・イエスタ［二〇〇一］（岡沢憲芙・宮本太郎監訳）『福祉資本主義三つの世界』ミネルヴァ書房（Esping-Andersen, Gøsta [1990],*The Three Worlds of Welfare Capitalism*, Cambridge: Polity Press.）。